

## 文 景楠 (教養学部言語文化学科)

### 言語と存在の語り方



#### 略 歴

- 2006年 東京大学教養学部卒業
- 2013年 米国ハーバード・イェンチン研究所訪問研究員 (2014年まで)
- 2016年 東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程修了 (博士 (学術) 取得)、東京大学教養学部助教
- 2017年 東北学院大学教養学部准教授

今までの人生の大半を、生まれたときに両親から受け継いだ言語以外のものを話しながら過ごしてきました。このことは今も自分の研究の背景をなしているのです、まずはそのいきさつを簡単に申し上げたいと思います。

幼少時代の一部を、それこそ親の都合で母国である韓国から遠く離れた長野で送ることになり、初めて母語以外の言葉を身につけました。その後いったん韓国に戻りましたが、日本の大学に進学することを決めてからもう十数年の歳月を外国で暮らしています。このたび幸いにも

東北学院大学に奉職する機会を頂きましたので、外国語を用いながら生活した時間は、母語を話しながら過ごした日々よりも今後さらに長くなっていくことでしょう。

長野から戻った若い自分にとって、身の回りの人と異なる言語を自分の一部として生きることは、国家や民族といったものとどう向き合うかという問題として現れました。

言語が国家や民族と結びつくことに強い必然性はありません。日本語を話さず外国語のみを用いる日本人や、日本語のみで生活する非日本人は、少数ですが実際にいます。遠い未来では、日本全体が今の日本語とはまったく異なる言語を話しながら存続しているかもしれません。

しかし、私が韓国語と日本語の狭間で暮らし始めたとき出会った人々は、これほど柔軟な考え方をもってはいなかったと思います。「X国人ならX語を (きちんと) 話さない」と「X国人ならX語を愛さない」といった類いの主張を幾度か耳にしました。この主張の要点は、ただ特定の言語を正しく使用しなさい、またはそれに愛着をもちなさいと述べることにではなく、ある言語を使用することとある国家に属することを強く関係づけるところにあります。私はこういった主張を苦痛に感じ、すぐそれに反発したのですが、自分を待っていたのはそこで受けた違和感をつきつめて考える余裕などまったく与えてくれない退屈な受験生活でした。

なんとか大学入試を終えて再度日本にやってきた自分にとって、大学が提供してくれた自由

はとても心地よいものでした。文学少年だったこともあり、いくつかの外国語の授業を履修しました。後ほど専門にすることになった哲学に触れることができたのも、ちょうど大学一、二年生の頃だったと思います。

哲学は、言語と国家の関係といったものに対して自分がぼんやりともっていた違和感をはっきりと自覚するための大きな助けとなりました。簡潔にまとめるのは難しいですが、自分の問いは結局のところ「何が本当に在るのか」という伝統的な哲学の主題と関わっていたのです。

「言語」と「国家」の関係をまじめに問題にするためには、それらがどのようなものであるかを、先ず個別的に理解していなければなりません。しかし、目に見えず手で触れることもできない国家のようなものは、その正体をつきとめることが非常に困難です。極端な場合、「そんなものは実はないのだ」と主張することすらありえるのです。本当に在るものは何かという問いに答えること、言い換えれば、「本当に在るもの」と「実はないもの」を分ける基準を手に入れることは、言語や国家の関係をきちんと考える際にも避けて通れない課題です。

「在る」、つまりは「存在」をめぐる探究は、古代ギリシア人の思索の根幹でもあります。自分が研究対象としているアリストテレスは、そのなかでも際立った哲学者です。彼は、存在とといった抽象的で扱いづらい事柄を尋常ではない厳密さで語ろうとした人だからです。議論の主題となっているものを単に神秘化することも、もしくは頭ごなしに拒否することもなく、淡々としかし緻密に描写していく彼の筆致は、文学作品がもつ躍動感を与えることはまれです。しかし、物事を可能なかぎり明晰に語ることにあこがれていた自分にとって、彼の残した著作は

いつしか「好むと好まざるとに関わらず読まなければならないもの」になっていました。

ギリシア哲学と少しばかり真剣に向き合うようになってからわかったことは、何千年の間多くの優れた知性が生涯をかけて取り組んできたにもかかわらず、そこには未知の部分がまだまだたくさん残っているということです。その一片が、結局大学院時代を締めくくる自分の博士論文のテーマとなりました。

アメリカ留学を挟む形で多くの先生方のご指導と友人たちの助けを借りて書き上げた博士論文から、複数の言語の狭間に暮らすことの意味や国家や民族の正体を炙り出そうとする努力の痕跡を見て取ることは、もうできません。自分が近頃読んでいる文章やこれから書こうとしているものも、身の回りの事柄を解明するよりはアリストテレスの著作を理解することそれ自体を目標とするものです。複数の言語の入り交じった迷路の中で絶えず自分を突き動かしてきた違和感は、それ自体は背景となり遠のきましたが、代わりにいくつもの新しい問いへと自分を導いてくれたことになります。

これが必然なのか偶然なのか、前進なのか後退なのかはよくわかりません。幼い頃の私が、韓国語でも日本語でも英語でもない古典ギリシア語、より正確には、古代ギリシア人にとっても異質だったろう「アリストテレス語」とにらめっこしている今の自分を見ていったいどういう感想をもつのかも、皆目見当がつきません。それでも、物事に誠実に向き合おうとする態度を忘れず保っていることだけは、なんとか評価してくれたら嬉しいのですが。